

---

# 「目と目と眼」～見えすぎる世界で安定したい俺達～

冗句アー (二枚あつたらハズされる方のJOKER)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「田と田と眼」～見えすぎる世界で安定したい俺達～

### 【NZコード】

N3874V

### 【作者名】

冗句ア一（一枚あつたらハズされる方のJOKER）

### 【あらすじ】

人が滅び、かつての人類の生き残りが「亜人」と呼ばれるよくなつた世界、俺はいつもの学校で何気ない生活を送るのだ。  
それは……

(前書き)

お題：カーニバル・シミュラークル・第三の田 といひ題廻です。  
どうかお田を汚しですがお暇なら読んでやってください。

人類の環境はある日を境に劇的に変化した。

たつた一つの発明で、人間の多用性が死んだんだ。俺達は、いわば劣化コピーだった。

理由を問うにはまずあげなきやならないのは……プライバシーの破壊。

昔、誰かが言つてたような情報社会化による個人データ漏洩の脅威ではなかつた。

崩壊の根本的な要因は便宜上、「第三の目」と呼ばれる。

それはそれはセンセーショナルな発見だつたらしい。……研究者は口々に叫んだはずだ。

「これで世界は変わる」

と。

実際、人を取り巻く状況は大きく変わつたようだ。このあたりは皆が授業でまず一度は通る話だつた。

……そして人類は滅んだ。

俺達、言わば「亞人」の取り返しの付かない過ち。この事はもはや暗黙の了解として今や大人子供問わず知つてているものだ。亞人の文化は一種のシミュラークルみたいなものだつた。

俺の居る時代は、かつてはいたはずの人類の文化に対する懷古で出来ていると言つてもいい。

皆が在りし日を取り戻すために躍起になつてゐる状態なんだ。

それだけ失つたものは大きかつた。

その対価に俺達が得たもの、それは……「透視能力」。

「海人、ごはんよ」

床の下より俺を呼ぶ声が聞こえる。俺はベッド上で布団をはね上

げ起き上がる。

また俺は考え方をしてたのか。

次の拍子、立ちくらみで軽く吐き気がしたけど……我慢、我慢だ。静かに寝床に腰をかけたまま、俺はゆっくりと目を開けた。……と言つても左右二つの目は既に覚めきついていた。

これから開けるのは「第三の目」。眉間に存在する……比喻とかなしで眼のようなものだ。

俺は意識を束ねるように深呼吸した。人によりけりらしいが、俺は全ての目を開けていた方が集中出来るんだ。

そして、俺の思考の中にビジョンとして入つてくるものあつた。

（「ソロの上にある……フライパンと……目玉焼き）

「また目玉焼きか」

だけど当然か……。豪華な料理がなんて滅多に食べられるものじやないし。

例えば俺が憧れている肉料理、とか。昔は家畜の肉が食べられていたらしい。

今では謝肉祭だけが残つてゐる。もはや前時代の遺物になつてゐるかな。

だけど個人的に非常に楽しい行事だつたりする。理由は……行事を透視出来るんだ。

発明は祭りを階で共有する事が可能になつた。

「第三の目」は、世界中全ての亜人共通のものだつた。

そしてそれが亜人と呼ばれる理由、人類が淘汰されてしまつた理由なのだろう。

俺は既に熱氣で蒸せている二階を後にし、階段を下りた先のダイニングに駆け寄つた。

「いただきます」

食事に肉がなくなつた理由、つまるところ、それも透視のせいなんだ。

俺は不思議に思つが……なぜか多くの人々は見てしまつたらしい。

家畜がほふられる所を。

……食欲が失せるだけでは済まなかつたみたいだ。果たして肉料理は地上から消えた。

幸い代替がきいて動物性タンパク質は卵、牛乳で摂取することでき補うことになつたんだとか。

当時は「第三の目」がないと人間扱いされなかつたらしい。というか、自分を守るためにその能力を取り入れざるを得なかつたようだ。

どういう理屈か俺は忘れてしまつたが遺伝子レベルで深く食い込んでいいるという話だ。

そして透視の出来ない人類は、ついにはいなくなつた。

亞人は、後悔した。……のだろうか？ 俺にはおぼろげに推測するしかない。

なんせ昔の話だし。

俺がもそもそと考へてるとチャイムが鳴つた。

「え、まだ食つてないよ」

俺は嫌々ながら立ち上がる。そして、少し歩いた先にあるトイレの扉を開き便座に座つた。

俺は考え得る最速の動きでズボン、パンツをずらし用を足しながら出ない。まずい。

ある程度時間が経つともう一度チャイムの音がした。

横の個室にいた母が出てくる音が聞こえる。

「待つてっ！ まだ俺……」

だけど俺は渋々トイレを出た。小さい方だけ出せただけマシか。くそ。

時間割が決まつてているトイレが憎らしい。なぜこんな事になつているのか。俺にも薄々はわかっている。

「見えてしまつ」のが理由だろう。そして、トイレタイム中には透視してはいけない事になつていてるんだ。建前上は。

「今日は学校行きたくないな……」

渉りながら着替え始めた。シャツにズボンに……。あれ、これは

ハンカチ。

級友が前日に落としたやつだ。キャラクターがプリントされているちょっと幼稚な。

その持ち主は俺もよく知ってる……。と思つと何かが見えた。

「わ、わっ」

それは下着姿の彼女だった。俺は慌てて両方の掌で目をふさぐ。けど、見えてしまう。

まさか着替え中だとは。時間的にもわりと当然なのだけど、俺には刺激が強すぎた。

下着と言つても見せブラ、見せパンみたいなものなんだ。だからやましくない。見られて当たり前だし。しかも防水ときた。お風呂に入つている時もずっと付けているわけだ。滅多な事じやはさない。

つまりエロくない。というのはただの言い訳だ。

と思うものの、つい眺めてしまう。……彼女は俺の片思いの人だつたりするわけで。

まだ発育途中な感じはあるけど俺もまだ高校生、目の保養が効き過ぎる。

「駄目だ駄目だ、俺もさつさと学校いかなきや」

俺の高校は結構近い所にある。正直、ただの箱だ。たしか今日は模試の日だったかな。

もちろん、テストに意味などなかつた。カニニングを止める手段などないんだ。

写して書いて提出するだけ。それを覚えるかどうかは個人の自由なわけ。

これがもし能力をはかるための行事だとするなら、それは透視の視力の見るものだろうか。

そんな感じで淡々と时限を消化していくわけだけど、その途中に

前の席のクラスメイトがざわつきだした。

「泥棒だ」

「なんだ……泥棒か……」

そのまま俺は眉間に意識を集める。見慣れた景色が浮かんでくる。それは青い制服に身を包んだ……警察だつた。

警察は手にいつもものものを持っている。携帯出来るサイズのチョークボードだ。

「またあそこか……」

そこは街一番のコンビニエンスな商店のアドレスが事細かく書かれていた。俺もよく知っている場所だ。この街の人々はいつもトラブルがあると警察を参照するよつしている。

……そして俺達の「実況」がはじまった。

「うあつ

先に様子を見ていたらしい生徒が呻いた。俺もまずは先ほど示された住所を浮かべて額で透視しよう。

一瞬、何が起こったかわからなかつた。俺の視界全体がチカチカする。

「『発光』だ！」

「発光だぞ」

それは最近よくある犯罪の手口だつた。実に単純な話で、「とても強い光源を持つ」。

たつたそれだけで目が眩むのだった。俺達全員の。

俺は咄嗟に目をそらしたが生徒何人かは強い刺激を受けたみたいだ。

そして、俺達の「追跡」がはじまった。

強制じゃないし別にやらなくていいんだけど、俺はこの瞬間が楽しい。

まず泥棒が逃げてしまつた後の残された商店の中をぐるっと眺める。

「店のレジの後ろに爺さんが膝を抱えてるぞー。」

俺も老人を発見していた。教室中が色々な情報でざわめきはじめる。

「泥棒はレジの金を盗んでいつたらしいぞ」

「とても強力な発光源を持つてた」

「じいさんは殴られたみたいだ」

「他に人は居なかつたのか？」

「泥棒は走つて逃げた」

怪我をしているのかフラフラしている爺さんはやがて店の外に出て、ポケットに入つている何かを取り出しているのが見えた。

（泥棒はデパートの方に逃げた）

ヨボヨボの字で、メモ帳に確かにそんなふうに書かれていた。

「デパートに行つたぞ！」

俺は声を立てるに商店の一番近所のデパートに意識を傾けた。大きめの建物の情報が俺に入つてくる。

隅の隅まで駐車場をざつと確認していると、道路側に何やら小さい太陽みたいなものが見えた。

「いた！」

先生も見つけたらしい。

……やがて遠くサイレンの音が響きはじめ、やがて静かに収まつた。おそらく、泥棒は取り押さえられただろう。

「発光」のせいで捕まえられる瞬間は見ていられないのが難点だ。それでも「実況」にはひとつエンターテイメントみたいな緊張感があるんだ。

警察官はこの「発光」犯罪で視力の低下に悩まされているらしい。お気の毒さま。

……捕らえられた犯人は小太りで、体より一回り大きい発電と発光する装置が取り付けられていた。

こんなので走って逃げられるわけないぞ。

透視出来なくするほどの「発光」はそれを生み出す電力がネックだった。それに簡単に市販で売っている訳もない。

俺達にとつてはちょっとした自由ですら求めるすべも存在しない。例えそれが犯罪であつても。

トラブルがあつたものの模試テストは終わり、俺は帰る仕度をすることにした。

すると、廊下で教師達が騒がしく何やら話している。

「また『実況』か……」

俺が歩み寄ると、……どうやら違つらしい。大の大人が深刻な顔で叫びはじめた。

「だつてそんなの冗談にしか見えないじゃないですか」

勢いで裏返つた声が俺に飛び込んできた。

「『第三の田』がない子供が産まれたなんて！」

……え、どういう事だ。

「先生、どういう事ですか！？」

教師達はこちらの事など気にも掛けてない様子だ。ただ、

「見たほうが早い」

と口々に言つてゐる様子だったので、俺は困つたときの警察の様子を見てみる事にする。

集中すると署が見えてきた。いつも掲示板の前のビジジョンだ。だけど何か変だ。警察でさえ慌ただしい。俺があつけにとられていると、掲示板に警察の一人が螢光のマジックで何やら書きはじめた。

(亜人の希望 二つ目の子供 産まれる)

思いがけない単語だった。それはまだ未成年の俺にとつても衝撃の出来事だ。

……いかん、俺ちょっと思考停止してしまつたかもしない。

駅前を覗いてみると、当然のよつに凄い人が山のよつに集まっている。

サンドウイッチマンにも。

看板にも。

ポスターにも。

掲示板にも。

プラカードにも。

おめでとう、と。

街が、社会が、祝福の一色だった。わかりやすいランダマークにも似た情報が書かれていた。

それはまさに、カーニバルのようだ。

俺は家に帰った後も浮かれてしまって珍しく夜眠れなかつた。

……透視の情報によるとその子供は大きくなるまで様子を見るらしい。

亜人が人類を復活させられるかはまだわからない。

ただ、遺伝子に刻まれたはずの透視能力がさっぱりなくなつてゐなら、期待は出来るかもしだれない。

……「一つ目」の子供は目隠しをされてずっと激しい光源に照らされているらしい。

常人なら目が潰れてしまうほどなんだとか。

そんなふうにしておかないと、またひつきりなしに透視されるのだろう。

目隠しと言つても、視力の落ちないよう中に映像は流れているという話も聞いた。

もしその子を一部の権威が過度なモルモットにしようとするなら、それこそ皆が「見て」いるので抑止力として働くだろう。

世間は新しいアイドルでも誕生したかのようにこの話題でもちきりだつた。

ようするに……とてもじゃないが俺達には見られないんだ。見てはいけない存在。

でも、今なら見えないものがあるといふことがとても新鮮で貴重

な感じがする。

今日はなにか気分がいい。

明日こそは、彼女にハンカチを渡すつもりだ。

(後書き)

まだまだ未熟な所も多々あります。が、読んでくださってありがとうございます！  
この場所は不慣れですが頑張りたいですね。また見かけたらよろしく！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3874v/>

「目と目と眼」～見えすぎる世界で安定したい俺達～

2011年9月14日03時29分発行